

宗教に於ける崇拜對象

——神と佛との對比について——

岡 邦 俊

一 神の根本性格

宗教は常に人間の實存にまつはる根本問題の解決を意圖するものである。即ち、宗教は實存としての人間にとつて不可避免的であり、人間存在そのものとも云うべき矛盾性、虚偽性、欺瞞性を内在する有限性と相對性——罪と死——に由來する不安と苦惱とを解決せんとするものである。かくて實存的人間にとつて宗教は人生最大の恩寵であることを、私は前回の本論集に於て述べて來た。私は更に進んでかゝる恩寵の完成される具的構造と論理、即ち宗教に於ける理想の實現（救濟）に關して二つの問題を検討しなければならぬ。一は、人間が救濟を體驗せんとする場合に、「聖なるもの」として崇拜される處の廣義に於ける神の問題であり、二は、神と人間との交渉を成立せしめ、それによつて恵まれる救濟そのものの論理である。今この論稿に於て取扱う問題は一についての解明なのである。

宗教と云へば人は直ちに神を連想し、神と云へば宗教であると云はれる程、宗教に於ける神の役割は大きい。

併し、神と云ふも實はその意味は極はめて複雑であり、キリスト教の神、神道の神、佛教の佛、その他原始未開の諸宗教に見らるゝ處の精靈、靈魂、靈鬼、主、マナやタブー信仰等に現はれてゐる神の概念は必ずしも同一とは云い得ないであらう。ともあれ、一應こゝでは宗教に於ける崇拜對象を神と呼んでおきたい。而も、如何なる神を崇拜對象とするかに依て、その宗教の性格が規定されると云ふも過言ではないほどに、神と宗教との關連は緊密である。ヤーヴヱ神を崇拜する宗教は云うまでもなくキリスト教であり、アフラ、マツダ神を崇拜するものはゾロアスター教であり、アラール神を崇拜するものはマホメット教である。佛教は本來神を有しない無神論的宗教であつたが、現在では佛を崇拜の對象とする宗教と云へるであらう。かくして、何らかの意味と形式とに於て、崇拜の對象を有せざる宗教は無いと云へるであらう。勿論かゝる神の名稱、内容、機能、性格、更に神に對する人間の態度等についてはそれぞれ異なるであらう。併し、全く神を有せざる宗教と云うものは存在し得ないであらう。所謂宗教の定義についてこれを見るも、多くの學者は神信仰の存在を指摘しているのである。マクス、ミューラ博士によれば、

「宗教とは、人間の感覺や理性とは獨立に、否、むしろそれあるにも拘はらず、種々なる名稱又は態度の下に、人間をして無限者を認識せしむるが如き精神的能力であり、又精神的性向である。」⁽¹⁾

こゝでは、神は無限者として表現されているが、博士自身の言葉の如くに、種々なる名稱や態度の下で、神は宗教生活の中で體驗されるものである。

「宗教とは、凡ての義務を神の命令として承認することである」⁽²⁾(カント)

「宗教とは、必要感から生じたより高き力の崇拜である」(アラン・メンチース)⁽³⁾

「宗教とは、孤獨なる個々人が神的なるもの―それを如何に考へていようと―と關係していると自ら考へている場合の感情、行爲及び經驗である」(ウィリアム・ゼームス)⁽⁴⁾

「宗教とは、人間にとつて最善乃至最大であると思はれるものに對する、人間の全的態度である」(G、W、ス
ツラットン)

「宗教とは、人間が人間以上のものと關係する生活である」(ウィリアム・アダムス・ブラウン)⁽⁹⁾

「神が人間よりも優れていると云ふことの十分な確信と結びついた神と人間との精神的統一の信仰、吾々の上にある無限と吾々の内にある無限と云ふ信仰は、凡ての宗教の核心である」(チーレ)⁽⁷⁾

以上の諸氏の定義によつても明かな如くに、宗教が何らかの形と意味に於ての「神」の崇拜であり、神との關係であることは否定出来ない。勿論かゝる神が必ずしも人格的なる存在である必要はない。原始未開宗教に於けるが如き、マナ・タブー信仰やアニミズムやフェチズムを初めとし、ムーア教授の如く「力」の信仰である場合もあり、ユー氏の如くに「彼岸にあるもの、超越するもの」に對する反應であり、或は又デュルケイム教授の如く「凡俗なるものと神聖なるものとを分つ」人間生活、シユライエルマツハ氏の主張する「宇宙の直觀」⁽¹⁰⁾「永劫的無限者と一なりとの感情」⁽¹²⁾「絶對憑依の感情」⁽¹³⁾、更に又、ルドルフ、オット氏の所謂「聖なるもの」⁽¹⁴⁾等の表現はそれぞれ異つてはいても、宗教にあつては、何等かの形と意味に於て、「神の存在」を否定することは出来ない。

かくて神は、無限者、力、神的なるもの、超越するもの、最善、最大、聖なるもの、等々の表現を以て取扱は

れているが、今これを一應ヒューム教授の見解に依て整理しておこう。即ち、ヒューム教授は神の根本性格を次の五項目に整理しているのである。⁽¹⁵⁾

- (一) 神の性格と力とは超人間的である。勿論ある點に於ては神も人間に類似する。
 - (二) 神は超感覺的であり不可見である。勿論ある面に於ては神も感覺的に表現されている。
 - (三) 神は世界と、人間の福祉と運命とを司配する。
 - (四) 神は宗教生活を營む人々の努力に對しては、これに反應する。
 - (五) 神は畏敬、尊崇、信賴、服從等の如き宗教的情緒を以て崇拜され讚美される。
- 更にヒューム教授は、以上の如き根本性格を有する神の概念には種々の相異點の存することを指摘して居る。⁽¹⁶⁾ 例へば、
- (一) 神の教について云ふならば、多くの神々を認める多神教と、唯一神を認める一神教とがある。
 - (二) 神の人格について云ふならば、非人格的形而上學的存在、或は抽象的原理として至上神を説く印度教や道教と、人格神を説く宗教とがある。
 - (三) 神の力について云ふならば、マホメット教の無制限に萬能であるが如き唯一至高の人格神を説くもの、ゾロアスター教の如く外部の相反する宇宙的力に依て神の力が制限されることを説くもの、更に、キリスト教の如くに、唯一神の力が神自身の道徳的責任に依て制限されるものもある。
 - (四) 道徳的責任について云ふならば、マホメット教に於けるが如く、唯一至上の人格神を專横にして無責任な

る人格と考へるもの、儒教やキリスト教の如く、至上神と雖もあくまで道徳的責任を有すると主張するものもある。

(五) 神の主要なる徳について云ふならば、ゾロアスター教や儒教の如くに全く神は正義であるジジエイトと考へるもの、又、キリスト教の如くに神を全く愛ラッと考へるものもある。

以上に於て、私は神の根本性格についての一般論を略述したのであるが、これによつて神の如何なる存在であるかは凡そ理解され得るであらう。たゞ本來的には何らの神存在を認めなかつた佛教にあつては、以上の神観なり神概念は通用しないものとなるであらう。蓋し神とは結局は、自然と人間とを超越せる聖なる存在であり、人間自らが適正なる工夫と修道とに依て完全なる人格(佛)となることを説く佛教は、しばしば宗教ではないとさへ云はるゝ如くに、本來的には無神論的或は汎神論的立場に立つ特異な宗教なのである。佛教は人間以上の存在に依存し、その働きや力によつて神に救はれることを説くのではなくて、全く人間自身の工夫と修道と云ふ「自己啓チツネイシヨシ培」に依て、苦惱なき悟りの涅槃に到り、眞の自由と解放としての解脱を體驗せんとするものである。キリスト教的一神教と表面全く一致するが如き、阿彌陀佛一佛の悲願にすがりて救はれて行く淨土佛教の場合にあつても、實はキリスト教の神とは本質的に異なる内容を持つものである。この點については後に詳論するであらうが、佛教を除く他の宗教にあつては、神存在の信仰はその宗教の成立にとつて絶対に必要な條件となつてゐる。宗教は常に人間と人間以上の存在との關係に於て成立するものである。人間と人間との關係内に於て成立するものを廣義の文化と呼ぶならば、宗教は明かに文化を超越する、謂はゞ「超越文化」と呼ばるべきであらう。

このような神信仰、神觀が如何にして人間生活の中で形成されたか、その始源は如何なるものであらうか、の問題は別個の重要な課題ではあるが、既に「宗教の始源」及び「宗教的實存について」の小論に於ても若干言及したこともあり、こゝには要點についてのみ述べておきたい。

宗教は人間生活に於ける不可避なる危機、破綻、不安、人間自身の本質構造としての有限性、相對性——宗教的には罪と死——に根源するものである。かゝる事態に當面して人間はその解決に苦慮し、而も自然的、合理的方法に依る解決方法に失敗した時、人間は必然に超自然的、非合理的方法に依る事態解決を教えられ、否、恵まれるのである。即ち、このような事態解決のために中心的役割りを果すものは神存在の信仰なのである。即ち、神存在の信仰は全く宗教の始源に結びつくところの、超自然的反應であり、非合理的順應なのである。かゝる超自然的反應と非合理的順應とを可能ならしめる處のエイデンシイこそ神存在の信仰なのである。換言すれば、宗教は人間性の限界狀況に直面し、従つて、不安を感じ、無力を自覺し、恐怖におののき、一般的方法を以てしては平衡せる生活を保持し得ざる場合、論理、合理、科學的方法を超越せる超自然的、非合理方法によつて、事態の解決を企圖するものである。従つて、神も亦、常に自然を超越し、合理を超越し、認識の過境、論理の彼岸として信仰されるものである。「聖なるもの」を廣義の神とし、聖なるものと反對なる「凡俗なるもの」を、廣義の人間存在とするならば、神の存在は常に人間存在と呼應するもの、兩者は常に求め合い、呼び合う必然性を持つと云へよう。

二 未開宗教に於ける神

吾々はこの問題の解明に當つて、先づタイラー (E. B. Tylor, 1832-1917) が主張したアニミズム説を紹介しておかねばならない。氏は「原始文化」(Primitive Culture, 1871) に於て、未開民族の間に於ける原初的神信仰としてのアニミズム (Animism) を主張したのである。アニミズムとは「靈的存在に對する信仰」であり、この靈的存在は人間界、自然界を支配しているものと信ぜられて居る。氏はかゝる信仰を崇教に於ける「最小限の定義」とし、未開民族に於ける普遍的現象であると主張したのである。即ち、氏によれば、原始人は一般に肉體とは異なる靈魂ソールの信仰を持つて居り、然してかゝる靈の信仰は睡眠スリープ、忘我エクスタク、病魔イルネス、及び死デスの如き現象と、更に、かの夢や幻想イマジネーションの如き現象から得られたものである。即ち、かくの如き諸々の現象を通して未開人は、肉體とは異なる靈の信仰を得るに到つたのである。彼等は睡眠、忘我、病魔、死の現象に於て、生命が肉體を捨て、飛び出し、肉體と生命とが分離せるものと考へる。又、夢や幻想に於ても、非肉體的原理としての靈が肉體と分離したものと考へたのである。かようにして、靈の思想は元々は人間の靈に最も關連して發達したものである。次いで、かゝる靈の信仰を通して、未開人は死後に於ける靈の存續コンティンや輪廻の思想を持つに到つたものである。即ち、靈は肉體の死後にあつても存續するものであり、他の人間や動物、その他の物の中に入つて、憑き行動するものと考へられている。⁽¹⁸⁾ 祖先崇拜とは、死者の崇拜であり、死者は即ち地上の肉體を有せず、從つて、死者は純粹ピュアの靈ソールとなつたものである。

以上述べたが如き靈の信仰は、本來は人間自身の持つ靈の考へから生れたものであるが、タイラーはかゝる靈の信仰を廣く他の靈的存在、即ち、あらゆる事物の中に宿る精靈スピリットの信仰にまで擴大したのである。實は、このようにしてあらゆる事物の中に靈的存在スピリチュアル・プレゼンスが宿つているとの信仰こそ、正に氏の主張するアニミズムなのである。即ち、アニミズムによれば、人體に靈ソールが宿つているは勿論、その他の湖、沼、山、川、水、海、森、樹木、動物等にも精靈が宿つているとしたのである。⁽¹⁹⁾こゝに自然崇拜としての種々なる形式、即ち、山嶽崇拜、動物崇拜、樹木崇拜等が生れ、更に又、特定の物に精靈が宿り、憑き、働いているとする呪物崇拜フエテリズムや、部族の先祖であると考へられてゐる特定動物の信仰としてのトーテムイズム等も發生したものとされてゐる。この意味に於てのアニミズムは、一種の自然哲學ナチュラライロジイでもあり、未開人が彼等の生存する環境なり、そこに發生する諸々の現象を説明せんとする苦心の結果でもあつた。

尙、タイラーによれば、かゝるアニミズムの段階より、多神教に於けるが如き人間的形態、人間的感情、人間的性質、即ち人格性や個別性を具有した神々の思想が發達して來ると云ふのである。文化人乃至半文化人の持つ空の神、雨の神、雷の神、風の神、大地の神、水の神、火の神、太陽の神、月の神等の神々が人間生活に大きな關係を持つに到り、更には出産、農業、死、戰爭の神々も崇拜されるに到り、これと共に死靈の崇拜者は祖先を神化し、部族の父祖としてこれを崇拜する。⁽²⁰⁾

二元觀(dualism)も亦未開部族の間に信仰されて居り、善靈と惡靈とが對立してゐる。併しアニミズムに於ける善惡の二元的對立は、何らの倫理的意義を有せず、たゞ單に「有益である」とか「有害である」であることを意味

するだけである。かゝる對立思想は一般に有益なる自然力、有害なる自然力と云ふ對立から考へ出されたものであり、特に光と闇との思想が對立し、やがてはペルシア教に於けるが如き二元觀にまで發達するものである。⁽⁴¹⁾

アニミズムの精靈信仰はやがて即ち述べたが如き多神教に發達し、更に最後には一神教にまで發達するとタイラーは主張する。即ち一神教は靈的信仰の最高にして最後の段階である。勿論かゝる一神教にまで發展する過程は様々である。多神教に於ける神々の中の或一つの神が高められて、それに優位が與へられる場合もあり、而もその場合にあつても部族のすぐれた祖先であることもあり、自然神の中の一人の神の場合もある。併し、嚴密な意味での一神教は未開人の間では知られていないし、そのような最高にして至上なる一神の信仰が未開人の間に若し發見されたとすれば、それは明かに高等宗教の影響であるとタイラーは考へた。⁽²²⁾

以上に於てタイラーの主張するアニミズムの概要を略述した。即ち、氏は宗教の最も原初型態が靈的存在の信仰であることゝ、この信仰がやがては多神教に、更に、一神教に進化するものであるとの二點を主張したのである。而もこの二點に對して、夫々反對の學説が主張されている。一つはアニミズム信仰以前に於ける未開人信仰としてのプレアニミズム (Pre-animism) 或はアニマチズム説 (animatism) であり、他はアニミズムより多神教へ、更に一神教へと宗教は進化するとの進化説に反對する謂はゞ退化説であり、この考へを徹底的に組織立てた「文化圈説」である。

先づアニマチズムによれば、未開人の間では靈魂、精靈の如き肉體とは異なる別個の存在、即ち、人格的、個體的實在の信仰以前に、非人格的、非個體的な超自然力、不思議な力、動力的エネルギーとしてのマナ (mana)

の信仰が一般に行はれている。マナは精靈と異り、人格性や個體性を有せず、従つて實體や實在ではなくて、むしろ靈的な不思議な「力」である。眼には見へぬが不思議な超自然力である。而もこのマナは謂はゞ善い力であつて、この力によつて人は幸福になり、作物は豊になると考へられている。このマナに反して、未開人は又タブー (Tabu)、即ち「禁忌」を信じている。禁忌は見る事、接近すること、食することを禁ぜられ、忌みきらはれたものであつて、禁忌を犯すことによつて人は不幸と災難を受けるとされている。かゝる「マナ・タブー」信仰こそアニミズム以前に於ける未開部族の一般信仰である。このようなアニマチズム説に立つ學者には、キング⁽²³⁾、コツドリントン⁽²⁴⁾、マレット⁽²⁵⁾の諸氏を初めフレーザ、プロイス、フィアカント、ホップキンス、ユーベル、モース、デュルケイム氏等の多くの共鳴者を出して居る。

次に、退化説を出張した人はラング⁽²⁶⁾である。氏は唯一の最高神、至上神を信ずる一神教がオーストラリア土人、アデアのピグミー、南アフリカのブッシュマン、ホツテントツト、バンツワ族、北米インディアンの若干部族、南米のケチュア族の間でも發見されたと主張する。これらの部族の間ではアニミズム信仰よりも、むしろ至上神、最高神とも云ふべき「全父神」(All-Father)なる一神が信仰されて居る。それは人間に創造者を要求する強い欲求があるために生じたものだと言つて居る。かくして、未開人間に一神教的至上神の信仰があり、他の然らざる人々の間にアニミズムが行はれているとすれば、進化ではなくてむしろ退化であると云うのである。進化説への反對はシュミット教授の周到な「文化圈説—Kulturkreislehre」によつて強く批判され否定されたのである。⁽²⁷⁾ シュミットに依れば人類の最原始民族は「原文化 [Urkultur]」の民族と呼ばれ、彼等は未だ農耕、牧畜

を知らず、狩獵と野生の果物等を採集し、漁業を主とする移動生活を営んでいた。この原文化は、(一)中央原文化（ビグミー文化）、(二)南方原文化、(三)極北原文化及これと密接に關連する北米原文化に分たれる。この原文化から一方には男性を中心とする父權的な牧畜文化と、共同的な大規模の狩獵を行うトーテム文化が發生する。他方には女性を中心とする母權的な農耕文化が生れる。原文化から分生されたこの三つの文化を第一次段階の文化と呼ぶ。この三つの文化圏は夫々地上の一定地域に發生した。即ち、母權的農耕文化はヒマラヤ山系の東斜面、イラワヂ、ブラマプトラ、ガンヂス諸河の谿谷地域に生れ、そこから後印度、南支那、前印度南西等に擴大した。父權トーテムズム文化は高中央アジアに發生し、牧畜父權文化は中央シベリアに發生したと推定される。これら三つの文化圏にあつた民族が人口の増大につれて各地に移動し、交互に二つづゝ混合して第二段階の三文化圏を發生する。更に、その三文化圏が混合して生じたものが、豊沃な大河の流域に繁榮せる第三次段階の古代高級文化であり、その後は歴史時代に連がると云うのである。

而も、シュミットによれば最も原始的な原文化の民族である東南アジアのネグリト、中央アフリカのネグロ、南アフリカのブツシュマン、東南オーストラリアの未開人の間にあつて、全知全能の至上神に對する初物の供物、定型なき祈禱を特色とする原始一神教の型態が発見され、むしろ、呪術、卜占、動物犠牲、靈魂觀念や死者崇拜は發達していない。これが人類の最も原始的な宗教の姿である。死體は單純な埋葬で、他界は天にいます至上神の許である。トーテム文化圏では、太陽神崇拜及び呪術の發達が特筆すべきものである。青年には劇的な成年式が行はれ、死體の處理に際しては樹上葬が行はれ、死者の再生も信じられている。

アフリカの一部や中央アジアに見られる牧畜文化圏にあつては、從屬神を從へた天神の崇拜が盛んであり、又好戰的な民族であるから英雄崇拜も行はれている。死者の行方は層のある天である。

母權的な農耕文化はメラネシア、東部ニューギニア、西アフリカ、アメリカ、インディアンの一部に見られる。極めて宗教的な文化で、母祖神や月の崇拜が著しく、アニミズムが發達し、祖先崇拜、死者崇拜も盛んである。死體處理は一度埋葬し後更に發掘して洗骨する複葬で、これに伴い髑髏崇拜スカムリンツが行はれ、他界は地下にあると考へられている。

ともあれ、原文化に於て至上神の信仰、崇拜が行はれ、而も、この至上神には永遠性、全智性、全慈性、道徳性、全能性の如き一神教的屬性が附與されていることは注目すべきである。⁽²⁸⁾

私は以上に於て未開人の宗教信仰に於ける神の觀方を概説した。アニミズム、アニマチズム、トーテムズム、及び文化圈説に於ける神觀に現はれた一連の思想は、謂はば未開人の實存的な生活に於ける超自然的適應を示すものである。即ち、未開人の神信仰は、彼等が生活の中で不安、危機、破綻、恐怖等を経験し、而も自らの力による自然的適應や處理が不可能となつた時、未開人は人間以上の超自然的なる靈力、精靈、神の援助によつて彼等の生活を調制し、自らの慾望を充塞せしめたのである。特に、未開人の宗教にあつては、自然の偉力、猛威、壓迫、不可抗力性と云つたものが重要な役割りを果しているため、彼等の神として崇拜されるものは殆んど自然の擬人化であり、人格化されたものである。かくて自然宗教と自然哲學乃至呪術とが、未開宗教にあつては混成している場合が多い。では發達宗教に於ける神觀はどうであらうか。

二 發達宗教の神觀 1

—キリスト教の神—

キリスト教と佛教とは、現存する世界の諸宗教の中で最も高い發達した、二大宗教であると云へよう。この二大宗教は或る意味に於ては、世界の他の諸宗教の源泉であり、母胎でもあつて、何らかの形で佛教とキリスト教との影響を、直接にか間接にか受けなかつた宗教はすくないであらう。即ち、佛教もキリスト教も共に所謂世界的宗教であり、民族と國籍とを超へて世界の人類に普く宣布されている宗教である。

今こゝではこれらの二大宗教の全面に涉つての比較研究を行うのではなくて、宗教一般の本質構造として、最も重要な面としての神觀についての論究を試みようとするものである。蓋し、如何なる神をその宗教の崇拜對象として持つか、と云ふことは實にそのまゝその宗教全體の特性を決定するものである。諸宗教間の相異とは、實にその宗教に於ける崇拜對象としての神の相異であり、神觀の相異なのである。日本の神道に於て崇拜される神、マホメット教のアラー神、ゾロアスター教のアフラ、マツダ神等はそれぞれ異つた神であり、そのために宗教も異つてると云ふべきであらう。これらの宗教に於ける神と、佛教に於て崇拜されている佛、更に、キリスト教に於て崇拜されているヤウエ神とは、各々異なる性格を持つものであることは勿論である。かくて神（崇拜對象）の相異はそのまゝ宗教の相異を決定するとも云ひ得るであらう。

このような意味に於て、キリスト教は一神教（Monotheism）としての代表的宗教であり、佛教は神を有せ

ず、神を必要としない宗教としての無神論的乃至汎神論的宗教 (Atheism pantheism) の代表とも云ひ得るであらう。では一宗教の代表としてのキリスト教の崇拜する神とは如何なる性格を有する神であらうか。又、無神論的乃至汎神論的宗教としての佛教に於て崇拜される佛とは如何なる性格を有するものであらう。

A キリスト教の神

既に一言せる如く、ある一つの宗教を正しく理解し、又その宗教と他の宗教とを比較して、相互間の特異性を明確にするためには、少くとも二つの點を論究せねばならない。一つは所謂「神觀」であり、他の一つは「救濟觀」である。神觀とは、その宗教が崇拜している對象が何んであるか、と云ふ問題である。

崇拜の對象は多くの場合「神」であるために神觀として取扱はれている。第二の點は所謂「救濟觀」である。即ち、その宗教の教へる理想の世界に到達する方法なり手續きである。これは多くの場合「救い」であり「おたすけ」であつて、かゝる救いやおたすけの體驗が如何にして惠まれるかが検討されるために救濟觀と呼ばれる。⁽²⁹⁾ 今こゝでは、第一の神觀に關して、キリスト教の神が如何なるものであるかを論究せんとするものである。勿論、キリスト教の神觀も歴史的發展の過程を辿つて居り、今日のキリスト教が主張し説く神觀に到る迄には、多くの経過が辿られ、論議が試みられて來たのである。特に、キリスト出現以前に於ける所謂「舊約」の神觀と、キリスト出現以後にあつて、キリスト自身が説き教へた「新約」の神觀との間には相當多きな相異點が発見されるであらう。併し、私はこのような歴史的發達の経過を考慮しつゝも、主として聖書自身の中に語られ、表現されてある神觀について先づ考へてみたい。

天地の創造者

(創世記一―一、イザヤ書四〇―一、二、二六、四二―五、四五―二二)

靈

(ヨハネ・四―二四、コリント後書三―一七)

不可見者

(ヨブ二三―八、九、ヨハネ一―一八、五 三七、コロサイ書一―二五)

永遠者

(申命記三三―二七)

不死者

(テモテ前書一―一七)

不朽者

(ロマ書一―二三)

全能者

(創世紀一七―一)

遍在者

(詩篇一三九―七、八、九、一〇)

全知者

(詩篇一三九―一、二、三、四、五、六)

不變者

(詩篇一〇二―二六、二七)

無限者

(ヨブ三六―二六、三七―五)

至高者

(使徒行傳七―四八)

唯一者

(マルコ傳二―三二、ロマ書一六―二七)

愛

(ヨハネ第一書四―八)

完全者

(マタイ傳五―四八)

聖なるもの

(詩篇九九―九)

宗教に於ける崇拜対象

正 義 (詩篇五—二一、申命記三—二四)

まこと (眞) (ヨハネ傳一七—三)

正 直 (詩篇一四五—一七)

善 (詩篇二五—八、一一九—六八)

偉 大 (詩篇八六—一〇)

惠深きもの (詩篇一一六—五)

眞實なるもの (コリント前書一〇—一三)

慈悲深きもの (出埃及記三四—六、七、詩篇八六—五)

萬物の所有者 (詩篇五〇—一〇、一一、一二、エゼキエル一八—四、ヨハネ黙示録四—一二)

自然の支配者 (エレミア三一—三五、三三—二五)

人と民との裁き主 (詩篇九—一六、一七、一八、一九、二〇)

救 濟 者 (イザヤ四三—三、四、六三—九)

以上の如き聖書に表現された言葉によつて、キリスト教の崇拜対象としての神ヤウエが如何なる性格の神であるかの直接資料は得られたと思ふ。これらの神概念を今少し整理するならば、キリスト教の神觀の本質は究明せられるであらう。即ち、聖書の中にあつて、神の本質なり屬性として表現されたものを整理するならば、キリスト教の神觀には少くとも次の如き四つの重要な神概念が存することになるであらう。

(一) 創造者としての神

キリスト教の神ヤウエは、天地の創造者、萬物、人間の創造者としての神である。一般に宗教は神と人との關係であるとされて居るが、ヤウエ神が天地、萬物、人類の創造者であるとするならば、キリスト教は正しく「創造者と被造物との關係である」と云い得よう。神が創造者であるとの觀方は實にキリスト教的神觀の最も重要なものの一つであり、萬物、特に人間が神によつて創られたる被造物であるとの立場なり、信仰は神の本質を規定すると共に、人間自體の本質をも決定するものであり、従つて、宗教としてのキリスト教の性格を構造するものとも云へるであらう。即ち、神は造り「主」であり、造られたる人間は「僕」として、神の命令には絶對に服従しなければならぬものとなる。神は主であり人間は僕である。而も神の創造は全く無からの創造であつて、既に存在する處の諸材料を結合乃至化合して萬物なり、人類を創り出したのではなく、それは全くの無からの創造であつた。それほどに神は全能者なのである。勿論哲學的には無からの創造に關しては多くの異論があり始めなき始めと云う根本始源の問題もあり、更に絶對者の自己限定として、神と世界とは同根であり、神からの分出が世界の起源である、等と考へるキリスト者もないわけではない。併し一般にオトリドックス正統派の考へとしては、あくまでも神は「無から世界、萬物、人類を創造した」を支持しているようである。殊に神の絶對性を主張せんとするならば、神が既に存在する材料を以てこの世界を創つたとの神と材料との二元性は否定されねばならない。どこまでも神一元の創造説が、キリスト教に於けるヤウエ神の性格であらう。かくて神の絶對性を強く主張せんとするならば、キリスト者は無からの世界創造説を肯定し信仰しなければならぬであらう。オットー教授も、宗教

に於ける聖觀念としてキリスト教に於ける「被造物感」(Kreature-gefühl)を強調し、そこでは「塵と灰」にか過ぎない人間、「無」にも等しい人間と神との關係を宗教感情としての「聖なるもの」^{グス・ハイリッゲ}の重要な内容としたのである。⁽³⁶⁾

かゝる無からの創造者としてのヤーウエの特性は、二元論、流出論、無神論、汎神論等と著しく對立するものであり、絶對的一神教としての神觀にあつては否定さるべきものであらう。即ち、二元論は神と對立する世界を許す立場であり、神なくして世界が自立し存續し得るとの立場は無神論となり、又、萬有はその本質に於ては神と等しきものであり、乃至は神であると主張する、汎神論、更に、世界は神から派生し流出したとする流出論(Emanation Theory)は悉くキリスト教的絶對一神觀に依て否定される立場であらう。

「我、地を造りてその上に人を創造せり、われ自らの手を以て天をのべ、その中に萬象を定めたり……われはヤーウエなり、われ萬のものを創造し、たゞわれのみ天をのべ、みづからの地を開きたり。……これヤーウエ宣へるなり」⁽³⁷⁾

かくの如く世界萬物の創造者としてのヤーウエ信仰は、われら人間を創りし主としての神の心を察し、神の心に叶ふことに日夜心がけ、神の意にそむかざるようにとの信仰と實踐が規定されるであらう。即ち、キリスト者はかゝる神の創造を信ずるが故に、彼等は又、何故神は人間を創りしかを質ね、そこに神と人間との正しき關係を確立せんとしたのであつた。

(二) 唯一者としての神

ヤーウエ神は、キリスト教にあつては唯一最高の神であるとされている。ヤーウエ神の外に他の神を全く認めざる唯一神的神觀こそキリスト教信仰の重要な特性である。勿論かゝる納粹な一神觀がユダヤ人の間に當初から確立されていたわけではなかつた。神のヘブル語である「エロヒーム」は元復數形の名詞であつて、このことはユダヤ人の信仰が多神教的であつたことを物語る實證である。ヤーウエ神の唯一性を高調することはモーゼの重要任務であり、彼がエヂプトの捕囚地からユダヤ民族を祖地カナンの地に引きつれて歸へつた時にも、ユダヤ人はこの地の神バール神とヤーウエを併せ信じていた。このような多神的信仰は、その後にも續いて出た多くの豫言者達の努力によつて、次第に絶正なる一神教に轉化させられて行つた。殊に豫言者エレミアによつてヤーウエ神の唯一性が強調されたのである。⁽³²⁾更に、豫言者第二エザヤによつて初めて現存するが如きキリスト教的一神觀が確立されたのである。「唯一の⁽³³⁾智⁽³⁴⁾き神」⁽³⁵⁾「神は唯一にして他に神なし」⁽³⁶⁾こそは、ヤーウエ神の特性である。かゝる唯一神としてのヤーウエは又全智、全能、遍在の本性を持つ絶對唯一神であることは云ふまでもない。

何れにもせよ、キリスト教にあつての神は唯一人であると信ぜられている。どのように修練し工夫をこらしても、人間が神になることは絶對に許されていない。人間が神になるなどと考へることは、神に對する恐るべき冒瀆である。神と人間との間には、永遠にこえることの出来ない深港があるとされている。神と人間とは交はることの許されざる永遠の平行線である。信仰によつて人間は救はれ、死後天國に生れたとしても、それは單に「神と偕に生きる生活」が惠まれたのであつて、人間が神になることは絶對に許されないものである。唯一神としての絶對性を持つ全智、全能、遍在のヤーウエ神は「世界の支配」と「世界の保存」とに關係するキリスト教の神觀

でもある。即ち、世界、人間にはそれ自身の力による存在、獨立自存的存在は否定され、萬物は神の意思によつて存在せしめられ、存続せしめられ、必要となれば破壊させられるのである。神は時としては世界に終末を持ち來し、かくて世界を創り直し、より高き創造態へと變化させることも出来るのである。神はかくして世界を保存し、支配するが、これらはみな神の慈悲、神の恩寵、攝理として信仰されている。特に、人類の歴史は神の支配下におかれてあり、神の指導下におかれてあるものとキリスト者は信じている。

(三) 超越者としての神

ヤーウエ神は全くの超越者であり、人間とは本質的に異なるものであるとされている。人間の側のいかなる營みも努力も、神を左右することは出来ない。人間の側から神へ通ずる道、交はる方法は全くとざされている。神は奇蹟を通はし、啓示を通はして、神自身が自らの意思と力で人間に働きかけ、交はるのである。それ以外に人間と神とが交渉し働き合う方法はないのである。神は人間にとつては「絶對の他者」^(ガッマデレ⁽³⁶⁾)であり全くの「異質」である。この意味でキリスト教を「神人懸隔教」の代表と見ることは誤りではなからう。かくて人間性を全く超へたものがヤーウエ神である。換言すれば、ヤーウエ神は絶對の力を持つ神である。宗教意識一般にあつても、原始民族が不思議な超自然的靈力なり力の信仰を持つていたことは承認されて居り、アニミズムやアニマチズムに於ける場合の如く、靈や力は人間の力に比して全く絶對の異質的な、聖なるものであつた。ヤーウエも軍神として表現され、雷や電その他火山現象とも關係あるものと考へられていた。⁽³⁸⁾ ヤーウエは力の神である。創造、保存、破壊、何れの力をもヤーウエは持つてゐる。

従つて又、以上の如き性格を持つヤウエ神は、考へられた、哲學的、抽象的な神ではなくして、人格として實在する人格神でもある。モーゼとヤウエ神とのシナイ山上での契約に基くとされる「舊約」聖書は、契約の當事者が人格を持つことを前提としなければならない。抽象原理としての神は人間と契約を結ぶことは出来ないであらう。

「エヂプトより導き出されたイスラエル民族が、モーセを仲介として、神ヤウエと特殊關係を結び、神の選民とされ、イスラエル民族はヤウエを一つの神として崇める義務を負ひ之に對して神ヤウエはイスラエルに限りなき無條件の福止を與へる責任を負ふたのであるが、（出埃及記一九一一以下）之が契約の起源とされてゐる。元來契約とは二個の人格に依つて成立する關係であつて舊約聖書の神が人格であることは神とイスラエル民族の關係がかくの如き契約なる語で表現されていることに依て明である。」⁽⁹³⁾

力の神ヤウエが、更に「義の神」「裁きの神」である點も充分に考慮されねばならないが、こゝでは割愛しなければならぬ。

四 父なる愛の神

以上に於て概説せるヤウエ神の性格は、創造神、唯一神、超越神、支配神等の表現に見らるゝ如く、概して「恐るべき、近より難き、正義にして力ある裁きの神——十戒に基く神」であつた。かゝる神の性格は又キリスト出現以前に於ける所謂「舊約」の神でもあつた。勿論、正義によつて神の命、律法、契約を守り實踐し得る人々を神は保護し、これらの人々に限りなき福祉の恵みを與へんことを約束はしたが、現實の歴史の中で行はれたイ

スラエル民族の神への反逆と律法の不履行は、その當然の酬いとしての不幸、即ち、他國での捕囚生活、そして亡國をイスラエル民族に體驗させ、一段と神のきびしさと正義の裁きとを彼等に痛感させたのであつた。

これに反してイエス・キリスト出現後の神觀には大きな轉換があつたようである。即ち、キリストの説いた神は、父なる愛の神であつた。正しき神の意思と思召にも充分かない得ざるが如き罪深き悪人を神の愛は許し、善行や功德によつて義とせらるゝと云ふよりも信仰によつて義とせらるゝ面が強く表はれているようである。この思想、信仰はやがて後のポーロやルーテルによつて強調された「信仰チキヤイケイジョン・バイ・フオース・アローンによつてのみ義とせらるゝ」への道が廣く開かれたように思はれる。「主としての神」よりも、「父としての愛の神」として神を人間の身近かに感ぜさせた點は、キリストによる「新約」の神觀に於いて顯著であつた。勿論「父なる神」の表現は既に舊約にも存して居り、決してキリストによる新しき神觀ではなかつた。⁽⁴⁰⁾併し、「この父なる神の把握に依てイエスの生涯には大きな静けき平安が擴げられている。このイエスの父なる神は併しながら決して淺薄なる樂天觀ではなく、反對に一つの大膽なる敢爲なのである。無限の崇嚴の中にイエスの魂の前に立つ畏るべき神に對して、イエスはゲッセマネの野に於て、十字架上の死の前にし、痛しい苦闘の後、「父よ御意のまゝをなさせ給へ」と祈つたのであつた。」⁽⁴¹⁾換言すれば、父なる神は無限の尊嚴の中にも盡きせぬ慈愛を内藏した神の存在であつた。

「キリストは地上的王國を望んだのでもなく、又律法の上に築かれたる、そして神をはるか遠くにながめてゐたユダヤ人の理想を實現せんとしたものでもなかつた。むしろ豫言者達と同様に、キリストは神を現在するもの、そして今現に心の中に語り給ふ神と信じてゐた。(中略)キリストは神を天に在ます父として、そして子供達

を愛し、外的形式よりもむしろ内的生活に於て服従を要求した神としてこれを見たのである。⁽⁴²⁾」

「汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要な物を知りたまふ。この故に汝らは斯く祈れ、天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を、御國の來らんことを、御意の天のごとく、地にも行はれん事を、我らの日用の糧を今日もあたへ給へ、我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ、我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出し給へ。

汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ⁽⁴³⁾」

かくして父なる神は恵みの神、免しの神、愛の神である。放蕩息子が自己の非行を悔い改めて歸へる日を待ちわびている父、その息子が歸へつた時、喜びもて、限りなき愛を以て迎へた父が愛なる父の神である。⁽⁴⁴⁾ 又、さ迷へる一匹の小羊を他の安全に歸へつた九十九匹の羊よりも、より愛した羊飼ひの愛が、そのまま父なる愛の神であつた。⁽⁴⁵⁾

かゝる神は當然精神的神として説かれたようである。ユダヤ教的舊約聖書の神は、ともすれば形式的、儀禮的、そして物質的なる意味に於て神を觀ようとした。特にキリスト出現當時のユダヤ人はそうであつた。凡てを人間の肉眼で見へる形の上で、神、信仰、福祉を考へた。従つて、信仰や宗教に於ける靈的な面、精神的な面が見失はれようとした。この時にキリストは出現して、神、信仰、福祉の靈的、精神的面を強調せんとしたのである。

「神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり」⁽⁴⁶⁾

「われ憐憫を好みて犠牲を好まず」⁽⁴⁷⁾

これを結論するに、キリスト教の「神は全能の力を以て世界を創造し、且つ攝理の知を以て之を主宰する。其の力を限るものなく其の知を曇らすものはない。如何なる奇蹟も神の手には可能であり、遠き未來も世界の運命も明かに見究められ且導かれる。之に對して人はただ黙して服従すべきであつて、神を懼れることの外に眞の知はあり得ない。されば神を畏れ其の聖なる神意に従ふ態度が人間に取つての最高の徳であり、かゝる人は律法によつて義とされるのみでなく、神の國に受け入れられ、永遠の生命を得るのである。(中略)神は人間の理性によつて認證され得るといふのでなく、自然の世界と人類の歴史との中に其の聖にして且仁慈なる意思が啓示されて居り、之は嬰兒の如き悟なき者にも顯はである」⁽⁴⁸⁾

甚だ粗雑ではあつたが、私はキリスト教に於ける神觀の大要を概説し得たと思ふ。そこには、ユダヤ民族、イスラエル民族乃至セム族と呼ばれる人々の神觀が明かにされたのであるが、世界の二大宗教として、キリスト教と對比さるべき佛教の神觀はどうであらう。即ち、佛教では崇拜對象としての聖なる存在を如何に觀ているであらうか。佛教で説き教へられている「佛」とは如何なるものであらう。佛とは神と對比して如何なる特異性を有するであらうか。佛はキリスト教に於けるヤーウエ神の如く、創造者でもなく、唯一者、超越者でも支配者でもない。吾々は佛教に於て全く特異なる神觀を發見する。否、神を否定し、神を必要とせざる「靜かなる涅槃」凡ての束縛と苦惱から解放された「解脱」を體得した人間を「佛」と呼ぶ佛教の神觀はどうであらう。佛と人間と

の關係は、神と人間との關係とは全く異なるものである。これに佛敎的神觀の特異性が存すると云へよう。紙數の關係でこの點の論究は次回の論集に於て試みられるであらう。(終)

- 註(1) Max-Müller. Introduction to the Science of Religion. p. 13.
(2) Kant. Critique of Practical Reason. (Eng. trans. By Abbot). p. 236.
(3) Allan Menzies. History of Religion. p. 13.
(4) William James. The Varieties of Religious Experiences. p. 31.
(5) G. W. Stratton. Psychology of Religious. Life. p. 343.
(6) W. A. Brown. Christian Theology in outline. p. 29.
(7) Tiele. Elements of the Science of Religion. (鈴木正雄氏譯) p. 401.
(8) G. F. Moore. The Birth and Growth of Religion. (菅岡吉譯) p. 27.
(9) J. C. Flower. An Approach to the Psychology of Religion. p. 25, p. 28.
(10) E. Durkheim. Les Formes élémentaires de la Vie religieuse. p. 50.
(11) Schleiermacher. Über die Religion. p. 37.
(12) くノキトシ、著、宇式譯、東洋哲學會、二四〇頁
(13) Discourses on Religion. chap. 2.
(14) R. Otto. Das Heilige.
(15) R. E. Hume. The Worlds Living Religions. p. 3.
(16) ibid. p. 3-4.
(17) Primitive Culture. vol II. p. 1-76.

- (18) *ibid.* p. 113.
- (19) *ibid.* p. 191-21
- (20) *ibid.* p. 224-282.
- (21) *ibid.* p. 282-293.
- (22) *ibid.* p. 304-5.
- (23) J. H. King. *The Supernatural*. 2 vols.
- (24) Codrington. *The Melanesians*.
- (25) R. R. Marrett. *Threshold of Religion*.
- (26) A. Lang. *The Makèné of Religion; The Origin of Religion*.
- (27) W. Schmidt. *Ursprung der Gottesidee*.
- (28) 岸本英夫編「神の問題」宗教論集第一輯 二六一-四三頁
龍谷大學編「宗教要論」八四-一八七頁
- (29) 岡 邦俊「神觀と救濟觀」二頁
- (30) Rudolf Otto. *The Idea of the Holy*. (Engtrans.) p. 8-10.
- (31) イザヤ書・四〇—一二、二六、四二—五、四五—一二、四八—一三・
- (32) エレミア記・七一—一八、八一—二・
- (33) イザヤ書四〇—一二、二六、四二—五・
- (34) ロマ書一六一—二七・
- (35) マルコ傳一二—三二・

- (36) R. Otto *The Idea of the Holy*. p. 36.
- (37) 出埃及記 一五—三・
- (38) 出埃及記 一九—一五、二〇—一八、列王紀略上一九—二一
- (39) 岸本英夫編「神の問題」六九頁以下
- (40) 「神の問題」一一—二頁
- (41) 同右・一二三頁
- (42) W. Hopkins. *The History of Religions*. p. 554.
- (43) マタイ傳 六一八—一五・
- (44) ルカ傳 一五—一—三二・
- (45) ルカ傳 一五—三—七・
- (46) ヨハネ傳 四—二四・
- (47) マタイ傳 九—一三・
- (48) 石原謙「基督教史」二八—九頁

(本學教授 宗教學)